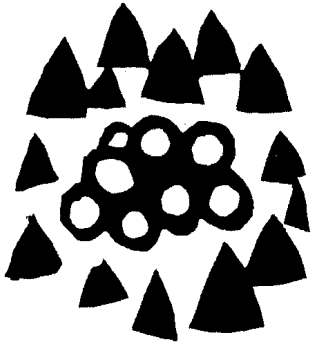
小説 教育者

第四部 どぶどろの子ら

添田知道

教育者

第四部　どぶどろの子ら



370 (NDC)

添田知道

小説 教育者 第四部

玉川大学出版部 1978

248 pp. 19 cm

添田知道 SOEDA Tomomiti

1902年，東京生れ。1916年日本大学中学校中卒。売文社勤務。演歌作詞作曲演奏を経て，1927年より文筆生活に入る。

著書に本書『小説教育者』（新潮賞）ほか，『利根川随歩』『演歌の明治大正史』（毎日出版文化賞），『朝風街道』『ノンキ節ものがたり』『香具師の生活』『春歌拾遺考』等がある。

現住所 東京都大田区東馬込2-7-12

小説 教育者 第四部

1978年7月25日 第1刷発行 ©

著 者 添田知道

発行者 小原哲郎

発行所 玉川大学出版部

〒194 東京都町田市玉川学園

電話 0427-32-9111

振替 東京 8-26665 番

印刷・製本 (株)図書印刷

乱丁本・落丁本はお取替いたします

(分) 1037 (製) 16014 (出) 4355

小説　教育者　第四部　どぶどろの子ら　目　次

第一章　少女の眼……9
未知の世界……10
虫……13
あんねえ……15
お　城……18
けぢめ……22
女一人……25
如　月……28
二つの祈り……35
第二章　馬　車　馬……39
わたくし事……40
この学は……43
新聞……48

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

異邦の客……52
つむじ風……60
青空の下……67
痣……71
杓子定規……79
忠と孝……82
第三章　戦争の底……87
奔流……88
免状……94
濡れた蒲団……99
楽焼の面……103
母……107
豆人形……110

レース編み……115
出刃庖丁……117
良心……124
自治の論……129
第四章　親……137
ミス・アーズマン……138
夜ひらく……142
低脳児……146
教壇のない教室……149
小山はな……153
粘土細工……161
箱根の先……166
進路……173

第五章　胎　動……183
病める土……184
真　摯……193
風景の町……199
美しき秋……207
地の声……216
祈りの餞……224
六年制……230
仕立屋　銀次……236
初版の後記……240
あとがき……245

装画・畦地梅太郎

第四部　どぶどろの子ら

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章　少女の眼

未知の世界

これはこれ、繿褸の花だな——と東は思った。

——せまい運動場にうごめき、くるめいてゐる子供たちは、どうみてもこれが、小学校の生徒だとはうけとれるものではなかった。その一人一人の身につけてゐるものは、柄も縞目ももうはっきりしない。よれよれで、襟は垢光りがし、袖口がこはばってゐるのはみな一様にそこで洟汁をこするからだった。すぐには男か女かの区別もつけがたい。どちらも頭がもしゃもしゃだし、女の子が筒袖でゐたりもする。性別や年頃に合はせた色や柄がこゝにはなかった。行きあたりの古着をつゞくり直したものばかりと思はれる。個々にはおよそまちまちの着物でゐながら、それがすべて同じ灰色に映った。校庭といふ、木柵をめぐらした小さな区劃の中に、異臭をこめてさうした子供らがうようよとゐるのは、なんといってもひとつの驚きだった。こんな情景を眼のあたりにした瞬間の、感得如何が、人それぞれの心の在り方を端的に告白させる。まづ眉をしかめ、あるいは唾を吐き、眼をそらしてしまふ、それが多くの人であったやうだ。が、灰一色にうごめきながら、子供たち個々は、それぞれ、あきらかに生きてはゐた。それは汚れたなりにも、また曲りなりにも、伸びようとしてゐることにはちがひなかった。その、かたちにはたやすく見えない自然の意志を、よみとることのできたのは、守屋東が純粋な少女の感度をもってゐたことでもあったらうし、また一面にあくなき探求の心をもって生まれてゐた故でもあったらう。

——これはこれ、ぼろの花だと彼女が感じとったのは、彼女のためにも、この子供たちのためにも、まことに幸ひであったといへる。

（この世に、いったい、こんなところがあったのか。）この日本の首都東京に、この不潔無残な、落魄者の集団して生活する町があり、その子供らを集める学校がある。このむくつけき町にとび込んでみると、彼女のこれまで住んでゐたところは、まったく天国であり、お伽噺の世界でもあったといへるのだった。

——彼女は妹を愛してゐた。たよたよと妹の操はみめよく、ひたすらに優しくかなしい性であった。それにか

へて東は、角ばった顔にどんぐりの眼、容貌の点ではつとに自分を投げてゐた東は、逆につとめて闊達にふるまひ、それがいつか一種傍若無人の後天性を養ってきたのでもあらうか。校長坂本龍之輔をおどろかせた少女の、不敵とさへいへる出現ぶりも決して故なきではなかった。東には妹の美貌が自慢だった。自分のもたないものを恵まれ具へてきた分身を、こよないものとしてゐた。美しいものにはどこか弱々しい影が伴ふものである。愛するといふことは、そのなよなよしさにかかる、あはれみいとほしみの情であらうもしれぬ。それなればこそ、その美を常に保護する役割に東がまはってゐたともいへる。

形影相伴ふかの姉妹は、番町小学校を母校としてゐた。東が妹の女学校受験準備を見てやるときに、一人も複数も同じだらうと、妹の級友十余人を集めて教へてやってゐたが、そんなことからも、東の保護補導の本能はひろがりを持ってきたやうである。

残念ながら、妹は志望の第一高女に落ちて、やむなく女子学院に入った。そのとき「ヤソの学校なんて、なんだかいやだねえ」といってゐた旧弊の母親佐和が、操の通学の日々が重なるうちに、「ヤソも満更わるいものでもなささうだね」ともらしもするやうになってゐたのは、操が操らしい場を得たといふことだったらう。仏教徒の家に育って東ももちろんヤソなどは知らなかった。

番町小学校の同窓が、日曜毎に顔を合はせて、それぞれのその後を話し合ふ約束になってゐたが、そんなとき、操はいつも友だちを教会に誘ひ込む。近くに番町教会があったからである。東もそれに連れ立って行ってみたけれど、それは、ヤソなんていったいどんなことをやるのか(ひとつ見てやれ)といった気もちからにすぎなかった。

ある日曜、そこで巌谷小波の話を聞いた。お伽噺の小父さんは、そのとき二葉保育園の話をしてくれた。それは、貧しい人々のために、その子供たちを預かって世話をしてゐるところで、学習院幼稚園長の斎藤さんと野口幽香子さんとがおはじめになった、日本では初めての試みです、といふお話に、少女たちはすっかり感動した。「貧しい人々のために」とは、なんと美しい言葉であらう。

その貧しい人々のために、自分たちにも何かしてあげられることはないだらうか、と少女たちは考へはじめたのである。操を中心に、七八人の仲よしが、その心を結

んで「王女会」と名をつけたのは、物語にある王女の如くにも優しく美しく、喜びを貧しい人々にわかちたいといふいみじき希ひなのだった。

さて王女会は何をしたらよいか。何が自分たちにできるだらうか。——その頃東がゐた第一高女では、レースの編み物が流行してゐた。そのことから東は思ひついた。みなで編み物をして、それを金に代へ、何か役に立つものを買って、慰問に行くといふ案である。操を盟主とする王女会のプランナーは東だった。みなが手を打って賛成し、すぐ実行にかゝった。栞を編んでそれを十銭づつで、それぞれがそれぞれの友だちに買ってもらって、さあお金ができたわ、これで何を買ひましょうかとまた額を合はせる相談がたのしかったのだ。

保育所の子供さんたちに、お八つをあげたい。それならばおなかをこはす心配のない葛湯などはどうだらう。いゝことね、いゝわね。そして葛粉をどっさり買って、二葉保育園を訪れた。砂糖を添へてゆくことはなんとうっかりしたが、かうした乙女心の慰問が喜んでうけられない筈はない。喜ばれれば、あゝよかったわと少女たちは一層に弾む。今度はどこへ行きましょうか。——日曜の番町学校で、編み物の手を動かしながら、たのしい相談がくり返される。

さうした何度目にか、雑誌やおもちゃをおみやげに抱へて、王女会の一行が、滝野川の白痴院を訪ねて行くときだった。上野の池の端で、つやつやとした島田髷に、お座敷着の褄をとってくる芸者さんに出会った。

（まあ）と声に出して東は眼をみはった。（きれいだなあ）しげしげと見入って、すれちがってから尚もふり返った。すると、繻珍の帯がだらりと垂れてゐるのが眼についた。咄嗟に東は、「もしもし、帯が解けてゐますよ」と大きく呼びかけてゐた。この白昼、気の毒に帯の解けたことを気づかずに行く人に、注意してあげるのになんのためらひがあらう。すると、ふり向いた芸者がにっこりと会釈をして、「どうもありがたう。——ですけれどお嬢さん、解けてゐるんぢゃないんですよ。これは（やなぎ）といって、かういふ結び方なんですよ」と説明してくれた。東には自分がそゝっかしかったといふ、そんなはにかみなどはなくて、ふうん、さういふものかと、つくづく感服のうなづきをした。（知らぬことをはぢることはない。）もぢもぢとしない。それが東を不断の行

動派にしてゐたのである。

東はいつも妹をわが誇りとしてきた。その妹が亡くなった。腺病質であったにしても、医家に育ちながらの早世は、天命といふのだらうか。操自身「わたしは召されて行くのよ」といってゐた。その臨終に近く、看病の東の手を、蒼い細い手がにぎりしめてきて、「お姉さま。わたしの信仰をうけついで下さい」といった。「かしこまりました」といつもの調子でおどけていってから、東はこれはいけないと気づいた。「えゝ、きっと。——安心なさい」と、ぢっと妹をみつめると、操はにっこりとした。そして姉妹は地上と天国とに別れた。——約束は約束である。東は番町教会に出かけて行って、洗礼をうけた。

この事あって三月ほど。——彼女が運命の糸にみちびかれて来たところが、この万年小学校だった。

虫

教室は廊下から窓越しに観てゐた。この教場もまるで様子がちがってゐた。机や腰掛はまだ新らしかった。しかしそこに在る子供らが、そのせっかくの席にぴったりとはまってはゐなかった。誰にも見なれてゐる小学校の、あの教場の雰囲気になってゐない。落ちつかず、たえず動いてゐる子供たちの視線は、すぐ窓の外に寄った東の方に向けられる。子供の注意が教課に集中しないことがわかる。そこを過ぎて隣の教室をのぞく。そこも同じだった。壇上の教師の懸命な身ぶりよりも、ただ窓に近づいただけの自分の方が、生徒の興味をひくといふのはどうしたことであらう。東はのぞく自分が授業の邪魔になることに気づいた。

休み時間になると、なだれ出る生徒といっしょに東は運動場に出た。子供たちと口をきいてみたくてたまらなかった。この奇態な生徒たちは、いったいどのやうなことを考へ、しようとしてゐるのだらうか。声をかけてみると、どの子もきまって、はにかみとはちがふ、妙な尻込みをした。そのくせ、その眼は好奇に凝ってそゝぎ返してゐるのだ。東はその眼に笑ひかけた。応へぬ眼もあれば、しょうことなしのやうに、にっとする眼もある。眼脂をためた眼もあった。

そのうち、彼女は子供たちの散らばった髪の毛や、着

装の乱れが気になってきた。「いらっしゃい」と手をあげても、子供は一向に近寄らうとはしない。さういふ子供に、東は自分から歩み寄って行った。だらしなくはだけた襟を正してやったり、ねぢれた帯やをれた兵児帯をしめ直してやったりするのだが、布地のよれよれは、手びのいしぐらゐでは直りやうもなかった。しかしそこまでふみ込んでみると、近々と彼女の匂ひを嗅ぎとるやうに、子供らはされるまゝになってゐた。

さういふ時だった。ふと、東は子供の襟もとをのろのろと匐ってゐる、小さなうすぐろい虫を見つけたのである。反射的にそれをつまみとると、かるくおさへた指の腹が、むずむずとした。彼女はそれをどうしてよいのかわからなかった。指の間で、数ある白い足をうごめかしてゐる微生物にいぶかしく見入ってゐると、その女の子は、「虱だあよ」と事もなげに言って、体を左右にゆすぶった。

その瞬間に、東は自分の全身がむずむずとした。虱といふ言葉は知ってゐても、実物にふれたのはこれがはじめてである。ぞくっとした。が、その嫌悪感は、彼女に、そこから身をのかせることをしなかった。逆に、子供らにたかってゐるその虫を、とり除いてやりたい気もちになった。さう思ふともう、その場ですぐそのことをはじめてゐた。襟をちょっと返してみると、縫ひ目縫ひ目には顕微鏡的なビーズ細工のやうにも、びっしりと並んで光ってゐるものがあった。それは虫の卵だった。その密着した微粒の一つ一つが、やがてのろのろと匐ひまわる虱になるのだとは、東はまだ知らなかったのである。

振鈴が鳴った。東はその女の子を手放すのが惜しいやうな気がした。のたのたと馳けてゆく子を見送りながら、あの子の虱もまだ捕り切れてゐないのに、この多くの子供らの一人一人がやはりさうだったとしたら、(――これは大変なことだわ。)

が、それが、彼女には却って張り合ひになってきた。この子供たちにたかってゐる虱をとり尽さなければ止まぬといふ気負ひになってきた。(いゝわ、わたしが全部退治してやる。)

参観の日々が、虱とりの日々となった。この奇妙な参観少女の動きに、校長坂本龍之輔の黒眼鏡は、ぢっと注がれてゐたが、ある日、「お嬢さん、せっかくさうやって来て頂いても、あなたにこゝの職員になってもらふ見込

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com